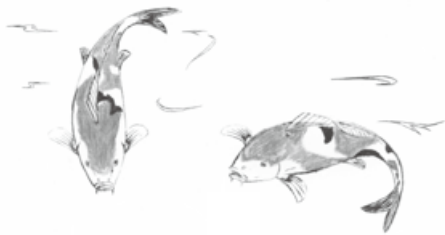

慈 恵



平成30年 No.65



冬

宗教法人 慈 恵 院 付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



龍
翔
鳳
舞

雪堂

この作品は昭和二十三、四年頃、六十六、七歳のものという。
線は澄み、造形的にも整い、とくに落款等には入木道の張堂龍禅師の用筆法が窺えるが、晩年のような広がりとは活気は、まだない。

横山天啓

書道の本源を求めて、八十余年の生涯を書と禅に捧げた横山天啓翁（雪堂、昭和四十一年八十四歳で死去）は、書における墨気と境界を重んじ、筆禅道を提唱、実践した世に媚びることなく清貧の中で道求めた翁の姿は「書仙」の趣があった。



「禅画報」より

黒衣の三宰相

慶長十三年、徳川家康の招聘によつて駿府へおもむいた崇伝は、家康の信任が厚く秘書官にとりあげられ、幕政に大きく参与した。その間、公家諸法度、武家諸法度などの制定、海外通商の文書の作成、キリスト教の禁制、仏教各宗の宗制などをてがけた。

当時、家康の機密に参与したものに、崇伝のほか喜多院の天海、増上寺の存応がいたが、世間は、この三人を黒衣の三宰相と併称した。

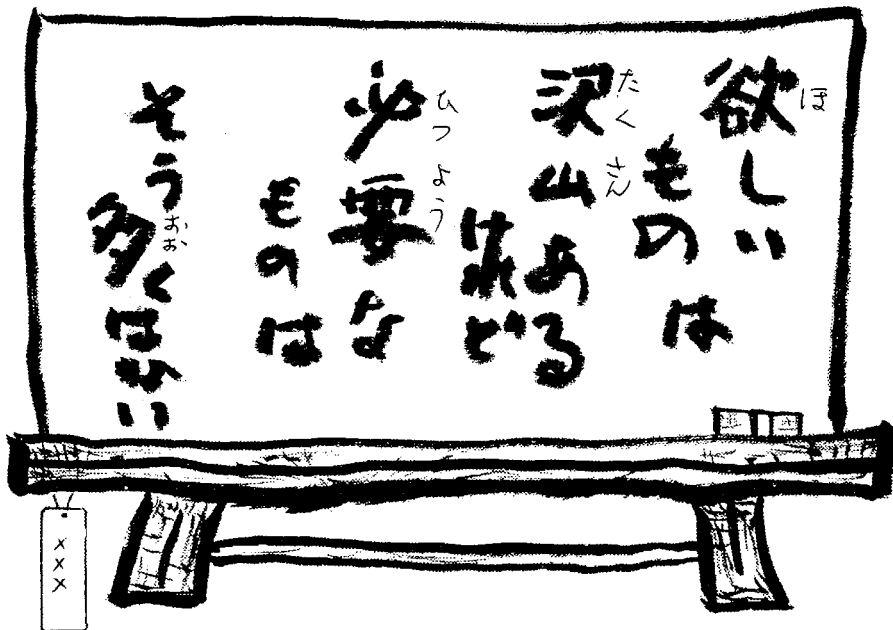
「禅門逸話集成」より

以心崇伝

(一五六九〜一六三三)

臨済宗。紀伊の人。南禅寺金地院の靖叔徳林に法を嗣ぐ。慶長十年、南禅寺に住した。徳川家康の帰崇篤く、駿府に赴いて記室となり、公家諸法度、外交文書、仏教各派の宗制、耶蘇教禁制などを手がけ、天下僧録、黒衣の宰相などの異名をとどろかせた。

掲示板





ぼくの名前はドン

秦野市 大嶋 幸子

愛犬ドンがわが家にやってきたのは、こどもの日です。「弟か妹がほしい」と言っていた一人娘は、以後まったく言わなくなり、弟のようにかわいがりました。抱いたり、走ったり、どこへ行くのも一緒に、毎朝、娘の通う小学校へドンはドンドン歩きました。

娘は「ドンに小さいランドセルを買ってあげたいね」と微笑ましいが、ランドセルを背負っても犬は登校できません。朝から騒がしい場面にまづいなと思っていると、別のクラスの先生に声をかけられました。

「ドンくんでしょう。子どもたちの一分間スピーチによく登場していますよ」

先生は犬の名前ばかりか首輪を替えたことまで知っていて、子どもたちがドンのことを話題にしていることにもびっくりです。

「ドン、いる？」と学校帰りに数人の男の子が立寄ることもあり、無断で散歩に連れ出す子もい

ました。

ある日、PTAの当番で交通安全のため交差点に立っていると、一匹の犬が走っていくのが見えました。ドンによく似た犬だなと思いましたが、確認できません。旗振り終えて家に戻ると、犬一匹誰もいません。やつぱりドンだったのか！

近所はもちろん、行きそうなところをくまなく探しても見つかりません。隣接する各地域の保健所にも電話をしましたが、その夜は帰らず、土日を挟んで四日で殺処分されると聞きました。泣きたような気持ちで三日が経ち、電話が鳴りました。

「青い首輪をつけた柴犬が動物愛護相談センター

に保護されています」

まるで出来の悪い息子の面会に行くような心境でした。いくつものドッグケージはまさに犬の刑務所であり、みんな怯えた目でこちらを窺っています。隅のほうで震えている青い首輪のやせ細った犬こそ、間違いなくドんです。車嫌いのドンが、わが家の車を見つけると一目散に飛び乗りました。近所の養鶏所が設置した捕獲器に捕まったと聞きました。

ドンはやがて老犬となり、数えきれない思い出を残して、真夏の暑い日にこの世を去りました。今は緑に包まれた慈恵院で安らかに眠っています。

冬 じよみ

2 月	1 月	12 月	
<p>2 / 10 涅槃会</p>	<p>1 / 1 修正会</p>	<p>12 / 31 除夜の鐘</p> <p>12 / 2 成道会</p>	<p>当山行事</p>
<p>●立春の雑草園の 2 / 4 立 春 草(よみ (山口青邨)</p> <p>●大寒の入り野の池を 1 / 20 大 寒 見失ふ (水原秋櫻子)</p> <p>●小寒や地に黒髪の 1 / 6 小 寒 一握 (井上静川)</p> <p>●門前の小家もあそぶ 12 / 22 冬 至 冬至かな (凡兆)</p> <p>●大雪や茎ばかり掃く 12 / 7 大 雪 藤落葉(涙人)</p>	<p>●薩埵富士雪縞あらし 2 / 19 雨 水 雨水かな (富安風生)</p>	<p>●天皇誕生日 12 / 23</p>	<p>二十四節気</p> <p>祝日等</p>
<p>2 / 11 建国記念の日</p> <p>2 / 3 節分</p>	<p>1 / 14 成人の日</p> <p>1 / 7 人日の節句 (七草)</p>		

「こよみ事典」東京美術 参考

北海道胆振東部
地震義援金にご協
力ありがとうございました

日本赤十字社を
通じて被災地にお
届け致しました

「もしかして
世渡り上手？」

府中市 小野 みき (50)

以前、我が家ではコーギーのように手足の短い垂れ耳の雑種犬を飼っていました。「佐和」という名前の雌で人懐っこくて誰にでも愛敬を振り撒く子でした。当時は家の中で犬と一緒に暮らすという習慣がまだない時代で「佐和」も庭を住処として、近所の飼い犬も庭に繋がれているのが普通でした。この「佐和」ですととにかく犬にモテる子で散歩コース上の雄犬には会うたびに歓待を受けていました。特に印象に残っている犬が3匹います。

1 匹目の子は「佐和」より大分年上で名前は

「やすちゃん」です。長い毛並みで慈愛に満ちた黒い大きな瞳が印象的な紳士な子です。夕方彼の食事時に通りがかるといつも豪華なご飯をもらっており、食い意地のはつた「佐和」は常にそのご飯を狙っていました。そんな無礼な「佐和」に対しても「やすちゃん」はいつも鷹揚に構えていました。そんな心の広い彼も流石に腹に据えかねたのか一度だけ吠えられたことがあります。それはご飯皿に唐揚げが鎮座ましましていた時です。「やすちゃん」にとつてもご馳走だったのでしょう。

「やすちゃん」にはとても悪いことをしました。おそらく百年の恋も一瞬で覚めたことでしょう。2匹目の子は1歳年下のとても奥手ながら一途な子で「マイクちゃん」と言います。この子の歓迎ぶりが群を抜いており、会えた喜びを全身で表わします。離れていても「佐和」を見つけるとその場で飛び跳ね、いまかいまかと待ち焦がれているのが遠目でもわかります。しかし彼の困ったところは感極まるとお粗相をししてしまうことです。近付くときは要注意です。一度顔から浴びたことがあり、それ以来ポジションングには注意するようになりました。そんな経緯からでしょうか、「マイクちゃん」への「佐和」の態度は他の子と比べて素っ気ないものでした。

最後の子「ダイちゃん」は物静かで大人の雰囲気醸し出している子です。失礼ながら前の2匹に比べると普通で地味な印象です。豪華なご飯をもらっているわけでもなく、ものすごく慕ってくれているわけでもありません。でも、「佐和」は「ダイちゃん」が一番好きでした。「佐和」は脱走の常習犯で一度、玄関を開けた瞬間目の前を脱兎の如く走り抜ける「佐和」を目撃したこともありました。そのようなことが頻繁に起こっていたので家族も心得ており、「佐和」が行く場所の目星はついていません。決まって「ダイちゃん」の所です。彼にまとわりつく「佐和」はさながら恋する乙女です。連れ帰ろうと迎えに来た私達はさぞかし恨まれたことでしょう。

このように誰にでも秋波を送るお尻の据わらない「佐和」でしたが異性の好みは意外と堅実でした。こんな子が世の中、上手におもしろおかしく歩んでいくのかもしれない。

作文募集

- ペットとの思い出、出来事など作文にしてお寄せ下さい。(800字以内)
- 尚、作文には題名を必ずご記入下さい。
- 応募作品は返却いたしません。
- 住所・氏名・年齢・電話を明記し、慈恵院編集部宛お送り下さい。掲載は随時とさせていただきます。